

赦すことの難しさ

4歳の女兒を殺害した罪で無期懲役の判決を受け、17年間服役し、冤罪とわかり釈放された菅家さんに対して、宇都宮地検のトップが正式に謝罪しました。「これまで私としては許す気持ちになっていなかった。今日はお会いして、少しだが自分の気持ちを抑えることができそうだ」と菅家さんは語っておられました。

理不尽な侮辱や苦痛の数々、17年にもわたる獄中生活の無念さをどうやったら晴らせるのでしょうか。いくら謝られてもそれでは到底収まるものではありません。もし我が身だったらと、他人事とはいえ、はらわたが煮えくり返ってきます。ではどうしたらよいのでしょうか。

私たちの教会仲間からは、アフリカのルアンダに佐々木さん一家が行って地味な和解活動に参加しています。ルワンダでは1994年の春から夏にかけて少数派のツチ族が多数派のフツ族によって、100日間で80万人も虐殺される悲劇が起りました。長い歴史の中で、権力を握った者が他部族を抑え込もうとして、軽蔑や憎しみを吹き込み、大統領の事故死をきっかけに、相手側の陰謀だ、ゴキブリ共をぶち殺せということになってしまったのです。

狂気がおさまり、社会が平静を取り戻しました。復讐を恐れて国外に逃亡した加害者のフツ族も戻って来ました。裁判が行なわれてフツ族の大勢が刑に服しました。やがて刑期を終えた人々が部落に戻り始めました。被害者と加害者がどのように折り合って、同じ部落で毎日を暮らしていくか。これは大変難しい問題です。

赦し赦されて和解することがどうしても必要です。教会がその問題に取り組み始めたのです。加害者たちに自分の犯した罪を悪かったと認めて、謝罪するように働きかけました。家族を虐殺されながら生きのびた被害者家族には、赦す心を持つように働きかけました。

赦す心を持たれた被害者の言葉が、加害者の固い心を溶かし、謝罪の言葉が生まれます。そして互いに励まし、励まされる交わりが、被害者の家を訪ねて、直接お詫びをする勇気を加害者に与えるようになります。次に生まれたのが、加害者が被害者家族のために家造りをして実際に償いをしていくプロジェクトです。これは一年前にNHKから「償いと赦しの家造り」として繰り返し放映されました。



あの番組の中に、黙々と日干し煉瓦を作り続けるタデヨさんが居ます。彼は生存被害者ジャクリーヌさんの家を造っているのです。彼は彼女に妹さんの殺害に加わったことを涙ながらに謝罪しました。しかし彼女は虐殺当時の状況が甦って

きたショックで病院に運ばれました。タヨさんの真摯な謝罪と償いの姿勢を、どうしてもそのまま受け容れることの出来ないジャクリーヌさんとの間の心の溝は、家が完成しても未だに、埋まらぬままだそうです。

でもタデヨさんはめげずに、彼女と同じ村で粗末な小屋に住む他の被害者の女性のため、仲間と無償で家造りをしようと思いたちました。ジャクリーヌさんの家造りは刑期中の償いでしたが「刑が済んでも自分たちの気持は変わらないことを行動で示したいから」と言うのです。彼の呼びかけに、同じ部落に住む元受刑者が15人、参加を表明しました。そこで教会は被害者の意向も確かめた上で、大工1名と建設資材を提供、自発的な償いのプロジェクトが始まりました。

「赦す」をルワンダ語では“kubabarira”といいます。“kubabara”（苦しむ）に、“ira”（相手に対して、相手のために）が付いて出来た言葉です。「赦す」とは「相手のために苦しむこと」だというのですね。何と味わい深い言葉でしょうか。

「赦す」と言ったものの、過去が甦って苦しみや憎しみがぶり返ります。そんな自分に苦しみます。赦す決断をしても、苦しみがなかなか消えないのです。でも「赦してくれて、生きる希望が与えられた」と言った彼の言葉が、彼女の赦しの決断の支えになっていたそうです。「私の決断が彼の心の闇に光を灯している」と思うことで、彼女の赦しが本物になっていっている。相手のために苦しみながら赦しが本物になり、彼女自身も救われていくのですね。菅家さんも苦しみながら、赦す心を本物にしていかれそうですように願います。

“憎しみは争いを起こし、愛はすべての罪をおおう” 聖書